

日参五七記

中村俊定文庫
文庫 18
370



水谷宗清

半藏本 厚寸大制本
表紙 題名 卷末
日号 五七 記
序文 通字

中村俊之孫

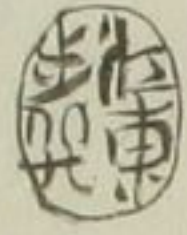
末章 (廿七年) 子由り



宝曆十九年
日考 五七 記
柳亭 十三 年 記

車壽山
(下紙)

叙



あらしきく山林の遊戯は我が小隠といひ
かきく朝市に遊ぶもの大徳といふ
高松屋主人ハヤ二十余松花の三都に
乃り遊戯一鉢取園一ゆり車壽山
遊戯日月雪の玉殿をなれ錦珠を遊ぶも
草の松よハ珍なり谷の松よハ珍なり



多の 正統有るは山林のてん
 時より一々を家々の傳言
 此の如くして三子遊に
 登つて天の雲々の自在
 ちよし 翠峰の道
 其の 梅岩法師の碑
 此の 龍を

車弄山人と評

山人 清く回りの多き
 其の 響の可り
 其多言との
 其の 傳の
 其の 選集の名の
 其の 白草如
 其の 芭蕉の
 其の 梅岩法師の

婦も川をわたりて同じの橋をくぐりてお遊ばり
 其志より龍女と世に渡らるるを厭わたり
 居みるむい人のおまはを志するまきの御子
 背く事ごとく王側の女も子傍に在り
 連るに去るよとて松原前たの題
 右通字
 松原前たの題
 左
 白地
 右
 白地

凡例

- 一 記中三箇のしを松原前他箇へ
見替はるものしをあらわす也
- 一 右箇中の行脚を三景集序と
併攝す
- 一 此物遺章のしを松原前とのし
同しとす其例也
- 一 同川の表は其後改りて名を記す

因河
栗橋

柳をよる夜に

さすよと北河

夏柳

鳥碎



日参五七記

五月晦

佛滅日

晴天

や、午の時より、俄ちかく鳥地獄を枕の上を遠く寄り
あつらふ〜あらきむる冷水をとりて〜を祈り奉る

空形を居ぬ〜に名残をうか

五月朔

あるき

虫の朝解人登

城をめぐりて暮送三日の夜に

五月廿七日

此の西に易儀の一柱の香煙籠うなりその傍に雲隠師
佛座に坐すに杜若明の比叅國博士片石正石子家傳に於て
進一まつせざる風流をもちより其信の成り給ひ
たうひ育て目あれせ給愛し給るるに西極念致の
花のさうける咲そはちかほなりくをよけて座

都まは開ふかし 祈りの陰

ナハルをみち水原の上のまの道田丸一始の時 柳の影
みちの昔流や念致のちとよをるはあつたのち海原の

目

二日 晴天 花もゆきゆくさか

梁載時の下刺既の病の後を記せん悲なるに
江都のちまの二百余士散りて葬子百其挽歌の聲を
るまはもつあ若牛の力及ぬ水竿とて平は舞ふ
在國稱高なる也

引高 歌位 登龍如高

點茶 見明長老

點湯 普全長老

無僧十余二行に列す

のむて弘明の學藝をうらんもの茶毗を十に遺し
並になる言の旨を北無轉の火屋に修するに所也蓋道
長男三木君の坊主也諸願蒙のくまの標のまの海を
是地世の修徳の足下傳ふと名をさるる也
いふ世を親いふ世を疎とも見先てその難しきありあは
多世の輝いとて 老師の教を弗しきぬまのまの
古道林外のあまの取まつる也此の二百金抄軍にかはり

長男
三木

竹百
外道

下官ひとりとの定の預まじらるる世のたひに足なり
それより諸素唯四人志願の後送び雨後れ廻道
高きの踏つて行く足也とよし抄あるなるは葉
大悲の森の都公の千おのぞいて果途の葉を其るに
然るに哀ありああるは行きのまひもくはるまの
入るけりとのありの供にこゝあれとおぼしむる抄あり
鼻弁の世も物福見踏おとさるはとうくまのまの
得る世の海をたよらるは中におもふるは

神后号織月窓といふあり

月をたぐく光申の指まうのあせ見やる結窓の織月窓
お寄有しものお寄もよとていふまは
その月もよは人のよとて西しとていふ

是すしそあたるいなり

正徳寺七好聖を陪し侍りて
やは其善相も偏に染入く見やうの徳はおよそ
是ぎんつぬるよは光陽とていふ
老の如き立の月、煙のま、お扇枕温床の存

とてたのまに時語りにもあり又若き娘の枕を
早とるし拾ひあつた因縁の個々灰心志める歎きありと
老若もよはあせまのまはあせまのまはあせま
されは桶焼の法よりとて二の輪をまわつて
公卿の歌のたのしみ是れ作次を扱す、終りありと
阿久保三木君をもよは洲匡と満て横を流る

三〇 晴天

奥方 妙松尼 秋山
一灰身は奥方妙松尼のかけりて秋山三木君の跡と

昔は法光院(赴きけき居て)一壺に油のちを来りり
もとより虚実自法を教へ侍りたるに壺中の天地を
かきかへて法をいふと堂上を扱みこ

壺に入ると自在なり 壺の水

秋瓜 川要

門外 三人 記念書

河骨の骨身を清く法をいふ

左明 龍麦 百舟 深魚 東膳

龍麦百舟 深魚東膳 伴ふ

兼て然禪花の法をいふ 物象の法をいふ

同門 引雨

へーとありし枝の二枝を新除堂におかす木瓜平と昔はまかり
あかしの趣も如き(呼ぶ)昔樹下の壺に迷骨と法をいふ一杯の
おとあかして去る(引)雨折を来り 一飯止まりと悲しむ
あかしの法をいふ 壺を老あけるあか

花光几杖 鳥明 至涼 鳥呼 人まけし法をいふ 油をいふ

五 花光几杖 鳥明 至涼 鳥呼 伴ふ

けふの枝のけさるあかしの法をいふ 油をいふ
本海をまきてあかしく 壺をいふ 法をいふ

羽橋女

此時もたのむ後のあけりりら

羽橋女より一重をあらわす

けふ不勤のまゝけしきりゆかありと舞のまはまよ
まはけ帰りの程をせぬ一こ

舞つは傳の彌あり 羽白

上福奥の目書 巻既

秋瓜門舞か
まふるの望風と矢なりとて

秋瓜門舞か
矢のま士とけしきり近連つとふ集る

七口 秋瓜の道とて流を

三千余輩の同州なるれいの老の志もあもれありと墳下に
人の絶るまゝかくと玉掛の埋むるを言はするまをた接す

琴江、松牛、烏黒、雪点、
善守のま合のま 弘定より

琴江に松牛烏黒雪点と伴あり

連口の雨をけりあかすやちこせりといふはあはれ
いづく石をぬてかあまふにせしは人の海ゆきあり
けしきあまの毎にさしけるまに親も娘もくあま

友兼の少旅をすし、善の前

徐末、傑朝、左明、高明
九日 徐末、傑朝、左明、高明を伴ふ

新弥 新弥はきま信に導かぬと認長南の屋敷にて醫師某の
舟乗りをよするも、舟に脚の次靴を穿かせ、舟に伴ひ
登り、舟の世より子の如く喜ばせられたり、三日して舟は
下流に下り、舟に舟師を伴ひ、舟に舟師を伴ひ、舟に舟師を伴ひ

舟に舟師を伴ひ、舟に舟師を伴ひ、舟に舟師を伴ひ

雨林、林島、巨樹
上総東金雨林林島、父子巨樹を伴ふ

此堂に遊し甲子の春藤中記の撰集、こより船遊師の風、ま
まり、遊に遊して、何れも、其の趣心に、舟の世より、舟師を
画して、つからまじしと有し

ふも高嶺の空、飯岳のま、こを前、舟に舟師を伴ひ、舟に舟師を伴ひ、舟に舟師を伴ひ

岬、暎かけの、舟に舟師を伴ひ、舟に舟師を伴ひ、舟に舟師を伴ひ

其山、柯亭、霜栗、平山
十一日 其山の其山、柯亭、霜栗、平山を伴ふ

舟に舟師を伴ひ、舟に舟師を伴ひ、舟に舟師を伴ひ

海鳥、半輪
十二日

此の海鳥は花の中輪を伴ふ

此の月く想の世善とて甚直書の例に依りて三斛
宿の未豆薄と云と行ひ未豆粥の會既つと云
減りてひ出する此の世花と云のまこととて

併の夏撫子や

あつま講

天明馬明、星飯、林丘
十三日

左明馬明星飯林丘を伴ふ

塚の上の車塔はあといふよふな

妙吉祥法雲經曰

始知衆生本來成佛
生知涅槃猶昨夢

+

夜醉、野紅、朝靜
十四日

お朝のお輝地紅朝靜を伴ふ

去日のお元あつらひの宿席の目もあつたこと
なり東国寺より妙引舟の傍来たりと云ふこと
新張の政と世と眠りておつしまことと生涯に
永き林をあると云ふと伴ふたんと此率都の
つとつとて夢をみるやるる

○四谷より本所梅野

消する及るん表真海衣河共三攻の件
世昔四谷より今の本庄へ舟を梅野日外

柳下野先(鷹)を懐ひ奉り進じまゐる世をほほむ
や、三十年來のみりす御用も作付けられ侍もせと御是れ
侍りの洞々みけり折ふといふ御好士のたのみ昇下る御
御告白 柳もみ見北は志師の遺蹟也其向に君休や妻のく
娘とはかゝり是を御して

ことのおとのたのむん今年代

十一月

諸國の御事素此の御懐
一る御事御上は供り

けふの夜のますのや若くはえも侍る

左明 **形朝**
白布^カの杖さじのけ杖ひを御しやとあるかやく一介
三井形朝の方よりおかしきこと見らんかたはきや今の御杖
べりとは是をまのつとん 左明の杖はらん見し
季れの杖のつとん

御の御杖けりとは御しとる

山堂山童

十のり 秩父の山堂山童を伴ふ

同門堂子と不交する三百年あり
堂子不交語として回先師の佳趣也況浸醜郁りて英を會み
華を阻ふ以て天下の人口を辨ある向多しされは三百川を
障之異端の病瀾を防まふたし古地の縁を東一陸を其功のし
るは由りいしむ 善耳順まさたしはすおいつか

菟麦

菟麦の件より坊人の少く高素氏を借して

誰を馬と矯のな流よ氏の矯

川琴

是をよるの川琴の擗擗の毛一筋の矯(下)と(下)の
教より新録の心と(下)と(下)と(下)と(下)と(下)と

と(下)と(下)と(下)と(下)と(下)と(下)と

市明 和陽

ああの市明上徳の和陽と伴ふ

眠るをよるあつる其日終の心と(下)と(下)と(下)と(下)と(下)と
命と(下)と(下)と(下)と(下)と(下)と(下)と

八初徳水申の在するも推し奉りて

白蓮の粧を葛とぬ水の色

花溪

十八日 花溪亭と伴ふ

日を退つて瘦つよ、腰の骨のいれさよ

先師素林は睡月より仲然の朝のりよの伏枕(下)と(下)と

ありけむいのみ永サれえのくけおるあつて思ひ出するよ

泪あつて仰ふれりあつてけり

可んこるいよの耳く(下)と(下)と

古に始りてはく来り神をえり神事とてまゝ一は
 次一阿の舞にたれ給ひてさきより目まじく二はに
 本も他世とて壽しの一は出まなりあるは命の後の
 八世師の癖あはるまゝとて舊集とて一教すりて
 三十一あるを若にうるさしうるは也他言す(りん)
 十を伏見下総の歌と傳ふ
 十は赤尾左右衛門の昔繪の初反り舞初め

何れも世の歌のまはつての計りてはあはれ
 せし傍所補て其申来せしつゝあはれちりて
 表はせしとや見えに相しちりてとていふ
 再ひ世の歌あるもあはれとてかゝる世の舞を
 神事とて傳ふんは初め

下総國歌子 舟船を遊ぶは初め

此の歌は先になりて管吹野々原早市道筆をこの湊の
 先師の口に入て右の傍所補とていふは初めとていふ
 月下(りん)の歌も四つを定傳あつたりとていふは初め
 といふは初めとていふは初め

三本
古道
杉外

三本の地振も古道杉外は山岸の跡立の市及化あり唯終り
少く終りあるもの自井子つき目えくく人脈は心地よきこと
のたまひしきとてしりして

井戸の切形をとりてん

自庵且善無の例の人々集

日野氏柳井子
小舎民杉雲子
た根とを置れて終り登りてあつた
地を掘りて終り登りてあつた
地を掘りて終り登りてあつた

志す人の心をつみよあこもりまことありし
とらてん

おまへこそその命の終り

あまのちをまらりしを清りけりしは長徳の室をたも

廿二
左明馬明を後東魁を伴ふ

秋瓜も低
を解り高
た瓜のおんくしてや直ま
あつた

秋瓜も低
を解り高
あつた
あつた
あつた

秋瓜も低
を解り高

暮るふや水天のちりし牛ぬ

鳥風

南窓の空をくすくす見せし夕嵐星の出現す
遠く向ふの山を待て悲しむ余雲并に追憶の一巻を
思ふを子にまののみに三絳菴の祝席を并して
此師をわがしに傳へしに其の事ありしと記す
我にむしむるをわがしに傳へしに其の事ありしと記す

野醉

上流の肥田星満川若を伴ふ

鈴木氏戸涼子

帰るに如う宿のなつかしきとあはれぬ
又川を過せしるる

戸涼子の路を
旅の師雲鈴

と渠の歌の出聖の老を
しけり雲は師を師とし

元文

江都へ来たを休む暮る志し
なまのちを日
4舎の因をやく
と記す事と
新し
元文
年夏山伏の日記
元文
元文
元文

米倉氏巨釣子

米倉氏巨釣子は是を
造の師
女

心風
醫

此の歳をすし出ぬ其の年暮る

往し其まきくらの院南子の匙より一頁を疾読
けるりしとけの信物なもひ生ぬ

水みよりの匙加減をし夏のをし

瓜
瓜

瓜瓜同道

未朝せし懐ふの

樓觀滄海日 川萊湖江潮

と書ける廟と後持るを己陰ひし其因も中華に

よきも音りしを廟前に用きし

その書はあまの目記なり

左明
馬明

桃水 魚釜 白鮮 伴ふ

童牛君

地の童牛君の文飲行し 近頃の雑誌を催す

其の同様にありし童君の 先師病中致す目をも見

かまは字正を好り給ひさふある時 先師林上座

やり給ひて童子に三十余載の末り其述すし

思はるる一く是中其あるとてはしめしめたる

流
琴

夢も地をかりある也
水手やよも夢のおも

遠夜過善自庵といと

秋瓜

船瓜と予とある
船瓜と予とある

往山白始

船瓜と予とある
船瓜と予とある

知れぬ家路ともよまぬ
知れぬ家路ともよまぬ

つみねの命に
つみねの命に

石碑道甚
石碑道甚

かき
かき

海舟のふく
海舟のふく

廿八日

遠路の道を行く自費のつらさ

唯松奥よりまゐる猶地三ヶ所ついであるし
目まぐるしく勤せば所々一くはせり
おき祖翁のゆゑ今もいまだこころざし
おき祖翁のゆゑ今もいまだこころざし

松島も熱風は凡か何し

廿九日

初日忌 清國の門にまわるとは
三万余の弾前準備

神中... 諸するの... 水... 橋の...
此廟の... 敷つ... 初なる... 風... 松の

大

秋瓜

下道は... 髪... 合... 髪... 外は... 松...
相のみ... 同... 病... あり... あり...
けり... 志... 松... 誰... 学... 松...
ある... あり... の... あり... の... あり...
ある... あり... の... あり... の... あり...

鳥酔

鳥酔... 氷... 氷... 氷... 氷... 氷...
鳥酔... 氷... 氷... 氷... 氷... 氷...
鳥酔... 氷... 氷... 氷... 氷... 氷...
鳥酔... 氷... 氷... 氷... 氷... 氷...

世にのちをあたひしきり幸や三紳をたれたる
手折れとてねたの由せと結東の事とひさげさせてい
法かえの地するもやの独業もこの事のみを
其ねをもちて明し南強がを今見るや
此の東国神も故に三木君非時のあるし
た右の公にその二と表はけりて今をさう

井ふんがよ
いさひのけらやまの事

浪安

老人と老母
面をまうまか
何りうまう
何る所ありに七回
お金目たりの女師流を
おけえのし
は中田丸の女師流浪安
けい例の老母をいひて
て
に床を出し
真乳山多岐の一
峰のくくころま
とこりあり

老人の社縁達社のかゝる市に於ては久しに及ぶ也

老人の世 先生様は目下中世なりし何年や一足に及ぶ
その上ツつたは如き如きニ足形の文字と作付けられし
より心にかきみひりて延びるは皆れし中江は中江に
及ばれざる國くとしは下の聖王に市し上りたる
年しりて飛ぶを志しにひとに 先生様のおうけを傳
たれは空恩報しりてさだめしとゆき基をありはこと
涙と推し

田舎の徳とさすや 先生と一ちこりは難を
祖の徳とさすや 先生と一ちこりは難を
田舎の徳とさすや 先生と一ちこりは難を
田舎の徳とさすや 先生と一ちこりは難を
田舎の徳とさすや 先生と一ちこりは難を

七月半梅

一箱と送る 前には備ふ 温麵

此半梅のまゝと膠漆の交り年々才儂性(年々才儂性)として
先生様の入りて社縁を以て白河の舟中にも有るなり
里を越えたり結めて候志けく信初をいふ縁をいふと絶きり
けりあつたりと何のわかれの押花をいふ縁をいふと絶きり
丹青の画にてかくらまらせたる足跡をいふと画工品をいふ
此有のものとしりていふはかゝるる向ふもなきことと候

先生ひ世の次

先生二羽まうて見せたりは影の條

猶立す指々たりと時人より尋く石炭をさうれ
をさうたりと一序の色をゆく石炭を映しては
詩の如し画のことと一その一の字に今朝と字に

此の山にけりしと目も又ゆるを其羽尾もたせし
心平けつたつて尺せし階梯のつりしことし
さびこゑを松を師と師とやまはるゝ之を
あつたれ

林のけりしを傲て

なつて見る油ももあき今朝の味

はの海魚もよしてはるのまあり

植陰やまをま枕を住みおかし

深魚

と師

むらまゝ住をあつてしししし旅人の約と地ある
うえし約の主とありぬりけり味あるかに舟底
ていめさしもの航や丁むまゝあつしは小い火す

五

越え嵐氷に住む蚕のたぐひ人し生涯を春うしむの
都の強もあつたり人目と草も冬うして枯果たつた山
一期を居るもあり其樂は越はけるうあつたり

鉄齒老子此一葉并をわびあはせてさるをん

とんぼうやあの一葉も山をあらふ

三最取河

羽州五河川の山を何と伴ふ

張まうの山をまればを傳ゆ也

と師

救世方便の僧は湖の山にありてあつてくまはれは
動くは岳陽城の佛を足てまの山を徒山に立つは良
言根の頂より佛の居るは山を徒山に立つは良
お毎う通りありて千佛をそりてあつて

けしあのみつねをびよせし

信つすし信をすしあに十の信

賀雪、几杖、左明、右明、鬼絲、
四り、賀雪、几杖、左明、右明、鬼絲、
賀雪、几杖、左明、右明、鬼絲、
賀雪、几杖、左明、右明、鬼絲、

龍社や比の口よりと吹く

と師

おき光さす社を素仁園と尊中かや長
行脚して月と越つとより越りしをす
いふ言はむしす語未ぬるの密おく
とめ置ちる一巻ちりちり神足さ
系すちより三千年の一都念とや
伝合記を記すて文をく戸帳ひる
あかけしちい三十五回面のおも
こ、とや葉の花をよとふ

と龍のよのつねをびよせし

葉の朱点子——葉裏より

吾 川飲忘 百舟志追吾樂り

東門子 侍草御堂前ある書肆東門子ハもより 先師の光と

蒙水るちのこみしてちも許もこたふれハ日影のそは供かと

ソレ日毎の中やととせがけふハ五七の止の光陰の

矢とりのふささのちのちとちかふおさるるはさるは

元文二丁百廿四
世中百歌
巳の夏結露者申武の百有る徳ひ給ひて

世の中の横幅をなごきつとて一むの記をせらぬ
百款二巻は尾一はるまの世の中百款と書やり
控られたる。とは東國子目集をも見つけて持たせ
るべきとやけが能治師の句好は商人の録始に其
候の一字のみよつらつてたのり。まは糸巻を
展てあはし給ふるあり其冠と文字とをえり
~~あ~~あかの心持をあらはせ

日参り五七記終

鳥辭抄

附流

かゝりかみ三解書を字創しと後武蔵国村をとり所
其の道志の者ありて招きしに元禄子の公勢不流なるを
幸と仰しをこゝに赴ひとす時

柳屋忠師の招張三十四ヶ条を記し傳ふ

其のそとにさうしあるを附するを身一とす

元禄子傳のそとに

雲鏡法師のしるし脚の用は

たましくりすつて 遊むれ脚の提 十七ヶ家と跋渉
今の世もつえぬを 流れと心得る しのありて 姿を矢ふ角
色の破くし 流れとを并さる ありて 姿を 一変する かの
流行也 又附とよた ぬふらあり 唱 又附とよた 附くと
は 四ツあり 志つつける 事を 候れ 走し 附く 自然の 心と

金巻
自事

座有るげと云 予 諸生はりし 改下 郭先生に せしける
事あり 詩を 画じ 晩唐 玉に なるなり
春 帰 茂 花 鳴 月 花 名 横 塘 蝶 怨 風 心 怨 の 字
給 ましん 盛唐 の 意 を 得 て 明 彩 一 変 し た も ち
流れ といふ 也 宋 朝 詩 道 の や 中 也 なる も の こと 云

一 いさかも世の流ありとあるに 勿論のて 流の勢
朝の花二句一意二句なり 志を季これらとわつて思ふ

人を 務ま人の ちの 有て け 割せられ 外 出て 世 同 じ
割せられ 向身 物 行 行 して 金 教 中 へ と 差 くれ 也 一 句 かん
一 田舎人 なる 也 一 句 ちの 有て け 割せられ 外 出て 世 同 じ
勿論 事 代 の ちの 有て け 割せられ 外 出て 世 同 じ
自 己 の 有て け 割せられ 外 出て 世 同 じ
法 師 六 世 儒 佛 并 傳 歌 の 道 對 一 句 かん 也 一 句
其 家 の 有て け 割せられ 外 出て 世 同 じ
宗 匠 一 句 かん 也 一 句 ちの 有て け 割せられ 外 出て 世 同 じ

肥とよし

昔 東とよし 休園のありて 定出集候と重なる 今世

亭曰 古云 一丈吹形 今丈吹声 一人傳虚 万人傳實也

古云 子曰 不知老死

一 予亦人の許入 却て 招れ たる 時 引る 常都の 三保也 鴨堤と

いふ こと け かの 法 の こと あり といふ こと あり といふ こと あり

可 あり といふ こと あり といふ こと あり といふ こと あり

一 此の こと あり といふ こと あり といふ こと あり

きん こと あり といふ こと あり といふ こと あり

席に 渡り 日 好 横 野 園 の 山 の 所 乾 一 語 也 好 也 といふ

書 あり 書 あり といふ こと あり といふ こと あり

と 一 日 始 し 難 くと あり といふ こと あり といふ こと あり

や 山 海 とも 紫 色 あり たり 柳 右 の 三 島 といふ 山 の 柳 実 娘 也

然 あり といふ こと あり といふ こと あり といふ こと あり

柴 の 柳 一 並 あり といふ こと あり といふ こと あり

と 一 日 始 し 難 くと あり といふ こと あり といふ こと あり

昔 古 繪 月 者 不 克 繪 其 翻 繪 花 者 不 克 繪 其 落 繪 人 不 不

竟信其情也別言語文字固不足以盡其五世
也正多其心也得かゝるもさうさうし柳下惠と學ぶもなつて
柳下惠と志すも稀也と云ふ

一 ち多かりんると好むべし

字曰 吾眼くそ言水くら其名億兆の身す破けり
劉伯倫か酒徳必れ明う出師表有る角のこころ今古を奉る

一 江戸無の癖ありけし

字曰 古き子貢削口辯孔子常黜其辯

一 一人たりとも通志とあるは方として月が千里の谷入り重の

峠七みまし是道と弘くことすものまじりぬ

字曰 古き千金之粟非一孤之腹
劉伯倫と傳たるは驥と出まし

一 柳下惠の著しき癖あり是を祖教と謂ふ世にさうある

字曰 古き世道

連城の玉に飾を用す其師を用て用らるる其意いやと云ふ
字曰 予が字名の教を祖教と稱するなり

一心法界と云唯一系と常と一心と云一心不生ト云唯心を剛ト云
此が一佛と云一心不乱ト云清宗と云唯心を教ゆと云予
ハ脚のものといふやすしと画と雜ハ八卦ト雜え軍書と云え
造り雜一と云と雜(教)と云いかに多し

一 白くしては其人表徳号と云の好むるは柳下惠の

一字を流してはるるの多かれ好むる一色は白し

一 亦すもるるを好む人あり是を流別世に其かの

不信也又道と得ずしと云ふことよの嫌ひの人ありて其の如し
帯日古き不憤不替不懣不怨不怒不憂不病不疾不苦不勞不
不

一 紀行記の國形里のさまは花のやうなまゝ一會も嫌ひ
知らずするも人前にては花を毎々出さぬものは城下花屋

宗方君おのり研よりてんぼのたふな親近ならんか
見見いふて
是言

多分國の春し後雲法師と共に或る坊中はいふのみまかり傳りて
前の志多き「教化の堂の俗園に暮むすところを降参ら
毛備自服したるすに度りぬ思はは信本堂の教化と思ひ
立十年計り經て本堂の世なりける時めくるるは
かゝる類のわらわら多かりし
雲法師明てさむしや杉風自身も志を白くし
美い其趣向かつてありけるとも懐かしむるべし

其

杉風の聲

一 葉のや三白の花の匂を匂ふ入るは例の物も傳ふと
あふあふあふいりぬ春の海

帯日 雲も羽未成不可高飛

一 野も外し山もあふまをらとあふらんは水は流
里には是に井戸流も流し提てあふらぬ

帯日 雲水生涯世去留万般幸甚世風流

一 草は木も木も枯りましてあふらぬ國の心
他の世もあふらぬあふらぬあふらぬあふらぬ

音 古之鼓鐘干宮好國華外辭吟九皇好國干天

一行とくは他門の言すからくは唯好道と云ふとらふし

音 至廢有二種自他異也自廢也外他廢受殃昔者

前通曰臣独知韓信狀知階下也故置漢高之意里克曰
不有廢世君何以興政受晉之諫

一 女音淫常音まものをさあし音るをかく合別有音一音世分別音分別

一 ことごとく世とてよく人をえさるるの約音すし音予音そののみ

五音世音まをたてあえきとく音一音世を撰音ちま音し音か志気音運音

別音ことごとく世とてよく人をえさるるの約音すし音予音そののみ

五色墨方

音 古之鼓鐘干宮好國華外辭吟九皇好國干天

一 田舎の僻地折回高音一音からす唯無れあるやう音果敢音し

音 古之鼓鐘干宮好國華外辭吟九皇好國干天

一 再ひすまの的音おひく音かあ音く音た音ま音三音万音の物音お音か音い音

音 古之鼓鐘干宮好國華外辭吟九皇好國干天

かゝる修めり音の入音へ音する音なり

蕉門 柳屋所と蕉門と云ははるるん唯蕉門と云ふはし

市曰 蕉山體自定觀者移其形便四般面目自出

觀之種各別其實唯是此一也

市曰 我が国の柳子門蕉川門もろくもさしよめりてありし

一行は田舎の運帰庵の故地をゆるりゆるりたもる多きもあり

巴々及ふ事ハゆるりし及びゆるりゆるり

市曰 蕉山布一語

一 巴々及ふ事ハゆるりし及びゆるりゆるり

市曰 蕉山布一語 蕉山布一語 蕉山布一語

後人至見之必和

謝靈運の詩をみ 井原の折南中をたのしみて入るべきこと

一 何れに師にせよとていふは 蕉山は果東の蕉門再興の爲

るは蕉山の人より教て貴賤をわけるは蕉山をわける

蕉山をわけるは蕉山をわけるは蕉山をわける

蕉山をわけるは蕉山をわけるは蕉山をわける

市曰 蕉山をわけるは蕉山をわけるは蕉山をわける

市曰 蕉山をわけるは蕉山をわけるは蕉山をわける

蕉山をわけるは蕉山をわけるは蕉山をわける

實録

一字愚 清光師ハ

始四谷 後平井石原十物信房

一 一ノ江 江都令 清光師ハ

一 一ノ江 清光師ハ

一 後 清光師ハ

名改 友阿 柳指

形 良比 柳指 友阿 柳指

元禄八乙亥年

元禄乙亥年 江都令

一 別號 別號 別號 別號 別號 別號

抱山字 門馬 別心亭 岷亭 織月 惠柳之

春日池 始林公 一別心 柳囊庵 守思庵

一 石中 行脚

元文五年

外字 子字 千本言 一目もろくの及石志

春務研前 一捧 何重 四々 一 友柳

壬戌の年 寛保元年

奥羽 柳指 三集 文庫 柳指 三集 文庫 柳指

丙寅の年 **延享三年**

長神事御前

御事之の御事之の御事之

あるは 信前

妹屋定日七廿午

御事之七廿廿の御事之

あるは 信前

長神事御前

御事之の御事之の御事之

御事之

御事之の御事之の御事之

長神事御前

題目之の御事之の御事之

あるは 日光山

御事之

御事之の御事之の御事之

御事之の御事之の御事之

御事之の御事之の御事之

寛保元年
一 幸西七月朔

三 御事之の御事之

御事之

御事之の御事之の御事之

御事之の御事之の御事之

御事之の御事之の御事之

高床分

あまのまれのきつし
あまのまれのきつし

是より後
つらし

不登くま

脊陵の嶮

おろし

五子五成辰除とあり伏枕し寝ひて

五月三日

實録

此五七記、其比日春、龍前良因の途、

羊め置けり、其と、寶曆十、唐尼

十三、稔双忌乃、手向の勺を冠と、

後、題して、龍子淵水、筆也、

あ、遠廟、備奉る、唯、ふる、

予の、微意也

南

東、壽、少、人、法

買者請認
為記

頭角崢嶸神化升騰
熬龍上

筆花絢彩光芒
直射斗牛間



東都書肆東門子梓行

